

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名:医学部保健学科/教授

氏名:吉留 厚子

授業科目名	周産期医療論
研修先(国・地域) 滞在地	ニュージーランド・ダニーデン
研修期間	平成29年2月18日(土) ~ 平成29年2月24日(金)
<p>〔研修の成果〕</p> <p>今回の研修では、第一次施設(助産院)であるClutha Health Firstと助産師養成課程のあるOtago Pplytechnicの2カ所の施設を訪問した。さらに、ニュージーランドの妊産婦の出産を支える特徴的な制度であるLMC(Lead Maternity cerer)の助産師達と会合を持つ機会を得た。Clutha Health Firstへの訪問では、施設の見学と助産師との質疑応答を通して、学生はニュージーランドの妊婦が助産師を選び継続的に関わっていく助産システム(LMC)の活動の実際、助産師と女性のパートナーシップ、妊娠初期から産後6週間までの継続的な助産師と女性の関わり、母乳育児支援、出産時の援助の実際について学ぶことができた。Otago Pplytechnicでは、助産師養成課程の1年生と2年生の授業に参加し、ニュージーランドの助産師養成課程における講義や演習を実際に体験することができた。講義・演習終了後には、学生と交流し、意見交換を行うことができた。また、Otago Pplytechnicの教員より、ニュージーランドの助産師、助産師教育プログラムについて説明を受け、施設見学での学びと合わせてさらに理解を深めることができた。最終日には、学生がニュージーランドの学生や教員へ向けて、鹿児島の文化、日本の助産師の現状、母子保健に関するデータ、助産師教育、助産師の災害支援について英語でプレゼンテーションを行い、お互いの国の助産師や助産活動について理解を深めることができた。学生の英語によるプレゼンテーションは、Otago Pplytechnicの教員より賞賛を頂いた。LMC(Lead Maternity cerer)の助産師達との会合では、助産師及び助産学生が同席した。ニュージーランドの助産師達の自信をもち自律した実際の活動を知ることができ、実習では学生と助産師が1対1でともに女性を援助するのは、全く日本の教育とは違っていた。さらに、学生は自分で実習施設や継続事例をさがしているの、学生時代から自律する教育ができていると感じられた。</p> <p>学生と研修の振り返りを行い、学生は女性とのパートナーシップ、対象者の文化や価値観を大切にしたり、日本の助産師の専門性、日本の医療をベースにした出産へのケアとニュージーランドの助産学をベースとした自然な妊娠や出産へのケアの違い、地域に根差した助産師の活動について考えを発展させることができていた。また、学生が世界的な視野の広がりを得て、同時に、日本の周産期医療に対する多様な視点を持つことができているのを感じた。地域貢献の成果としては、助産師育成、妊産婦への援助の相違をNZの助産師から直接聞いたり、見たりすることにより、各自が現状の課題を考え、将来就職後も忘れずに追及すると話し合うことができた。さらに、2つの施設の臨床助産師に2回報告会を実施し、質疑応答を通して、臨床助産師自身が施設の課題を考える機会になったと考える。助産学生1年生にも報告をした結果、学生は刺激を受け今後の勉学に良い影響を与えたことが分かった。参加した学生は報告の機会を数回得ることにより、プレゼンテーション能力が高まっている。最後に、学生同士が研修準備から報告等のまとめ作業を通して、グループダイナミックスが強固となり、仲間意識が強くなった。将来のネットワークづくりの基礎作りに役立つ研修であり、就職後には地域で助産師として活躍してくれると確信できた。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>今回の研修は学生の希望を取り入れながらも、教員が研修の企画・運営を行ったが、学生の好奇心、向上心と自律性を大切にするためには、学生が主体的に企画・運営する取り組みも必要だと感じた。</p>	